1Rp-2

青年期後期の親子関係ーその発達臨床的課題について

吉川晴美
(東京家政学院大)

(目的) 今日の家族状況のなかで、大学生は親子関係についてどのように体験・認識しているのだろうか。本研究では、大学生の日常生活における①問題(危機)場面の親のかかわり方、②コミュンケーションの頻度、③関係認識、④自身の満足度等を調査し、これらの結果から、青年期後期の発達臨床的課題について考察する。

(方法) 本学家政学部学生(92名)、他大学教育学部学生(82名)の女子学生計174名を対象に質問紙法による調査を実施。結果を$\chi 2$検定、残差分析等から分析、考察する。

(結果) 幼児期から大学期のなかで、中学・高校期に、親子関係の満足度が一番低い。大学期・低満足群は、高満足群より父とのコミュニケーションが希薄であり、食事や金銭に関する問題が多く起こっている。問題場面への対応が、母は両群の差はないが、高満足群の父が、意見を交わし共に考える、まかせ見守る等のかかわり方が多いのに比して、低満足群の父が、説教する、妻にまかせ等の外在、外接的なかかわり方が多い($p<.01$)。幼児期から大学期を通して恒常的な低満足群は12.6%あり、そのなかで親子関係を母接在、父外接と認識している場合が36%、両方に外接、外在と認識している場合が32%あった。以上から、幼児期から現在までを通して約1/4は親子関係にほぼ満足しているが、約1割強は連続的に満足度が低く、それが現在の、特に父との関係の希薄さ、外在化という面に顕在化している傾向がある。青年期後期の発達課題の、自立と対等な相互関係の樹立とが達成されていくためには、父子関係の改善、母の媒介的役割等による、関係発展への工夫とともに、幼児期からの父母子関係の三者関係的発展の重要性について改めて認識された。